

# 月曜評論

北京で再びなかに重大な政治的変化が進んでいるのではないかと推測しきりであったが、そのような推測を尻目に事後公表された中国共産党第十回大会の模様は、人びとの関心と注目を、そしてある意味では驚きをもって十分なものであった。

## 中国・十全大会の問題点

まず今回の大会が、林彪事件に公的な決着をつけるものになるであろうことは明らかであったが、発表された新聞公報によっても、周恩来政治報告によっても、林彪事件がいかに深刻な傷跡を党内に刻みこんできたかが改めて思い起こされる。当面の闘争の中心任務を「批修整風」から「批林整風」たどかからさまにいかえ、「ブルジョア階級の野心膨張、陰謀策、反革命闘争、裏切り者、売国奴」として、林彪をあへまでも糾弾して十分な政治・思想工作が通ん

てきたといへ、八全大会で政治報告をとおした劉少奇を九全大会の政治報告で党史上最大の裏切り者・反党反革命分子とキスト、変節者、敵の手先として断罪した「毛主席の最も親しい同志」として断罪したのである。

今回の周恩来報告では、林彪は入党直後からの裏切り者になり、世界を驚かせた新人・王光美や張春橋、李葆华といった著大な中野幹部を政治権力の中核に抜擢(は)つてき、重用し、その権力を度外から懲罰した過激な政治権力体制だと批判しているが、この点にもいかに中国官職の巧みな人

し、文化大革命のもう一人の担い手であった陳伯達にたいして、「林彪反党集団の主要メンバー、国民党反共分子、トロツキスト、変節者、敵の手先として断罪した」毛主席の最も親しい同志として断罪したのである。

見ても明らかにNO2になったが、制度的にはあくまでも集団指導体制をとることによって、劉少奇や林彪のケースに見られた権力の派閥的集中を避け、一回、二回、三回とあらわれ、また周恩来の政治報告自身、平和解放思想、批判などの継続も問題の所在を示唆し、

な成長がより多く注目すべきではなかつたか。しかも、王洪文は、張春橋にせよ、いづれも上海出身の「文革グループ」ではあるが、江青、姚文元の地位の明らかな優位に比して、彼らも、妻族派の官僚や軍官なども連綿し得る幅の広い基盤において成長してきたという点であり、従って十全大会

### 中嶋嶺雄



が、又奪グルのの躍進に決まらぬのである。今回、政治局入りしなかつたことは、先の郭小波復権について、大会直前にはウランフ、鄧麗林といった旧秦樞派の領袖が復活し、今大会では李井泉、李葆華といった地方に根を張る旧案権幹部が再び中央委員に復帰したことがあわせて、今後

★(一)★  
 事構想がつかえよう。だが同時に十全大会の指導体制がそのままたちも長期にわたって継続し、定着するのを見るのは、今日大会は、林彪批判の一大儀式であつたと思われ、まさに全党が「怒り」をこめて林彪反党集団の罪悪行を糾弾するのことによつてこそ、いまだ流動的な情勢にある党内の政治状況を調整し、凍結させたのだといえよう。そのいづれにおいても周恩来への批判と恩われる論調(たとへば、現妻主義、深化論批判、

★(二)★  
 最後に、十全大会が明らかにした対外任務は、ソ連との対決路線の強化という点にづいて。この点では、最近のソ連が従来は決しておこなわなかつた周恩来個人への名指しの非難をくりかえしていること、周恩来政治報告が「ソ修社会帝国主義のわが国にたいする不意の襲撃に高度の警戒心を促し、あらゆる用敵を察しておこなはならぬ」と強調していることがよく注目される。十全大会路線は、対外的には米中接近以来の現実主義的な国際外交の維持を示唆しているだけに、中国としてはソ連主敵論をさらに強化する必要があるのである。ただ、周恩来報告は、一方では平和共存の五原則による中ソ関係を考慮しているだけに、当面は、対ソ全面戦争のギリギリの抑止限界を自覚しつうえての対ソ抗争をさらに激しく継続してゆくことにならぬとちがいない。

(東大助教)